千葉県におけるオリンピック・パラリンピック教育推進校の取組の紹介

県教育庁企画管理部教育政策課教育立県推進室

1　はじめに

東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、本県でも「千葉県オリンピック・パラリンピックを活用した教育の取組方針」を策定し、全県を挙げて教育活動に取り組んでいる。ここでは、平成29年度オリンピック・パラリンピック教育（以下、「オリパラ教育」）推進校に指定された県内30校の中から、サーフィン競技の開催地である一宮町の一宮町立一宮中学校と県立一宮商業高等学校の実践事例を紹介する。

2　実践事例

⑴一宮町立一宮中学校

①取組プロジェクト

「心のバリアフリー」「スポーツ」

②取組内容

㈠ 車いすテニス体験教室を開催し、2017年車いすテニスシングルスアジアチャンピオンの鈴木康平選手を講師として招聘した。ソフトテニス部の生徒が車いすの操作を体験し、最後は打ち返すことができるようになった。

㈡ サーフィン講演会を開催し、一宮中学校卒業生の大原洋人選手、日本サーフィン連盟千葉東支部長の大海英一氏を講師として招聘した。大原選手から、「サーフィンを始めた頃は競技力が低く、周囲からも軽視されていたが、努力を重ね、世界へ挑戦していくうちに世界中に友人ができたことが一番嬉しかった。」との話や、「自分がやりたいと思うことを追及してほしい。人生は変わる！」といったエールも送られた。また、講演会冒頭で一宮海岸での練習風景を見せ、地域愛を育むことも意識させた。

㈢ 全校生徒からアイディアを募集し、横断幕の制作に取り組み、サーフィンの講演会場で披露した。美術部員が審査、デザイン決定、制作に携わった。

③実践において工夫した点

・車いす体験教室において、生徒の心情に迫る講話内容をリクエストした。
・アスリートの競技力の高さや社会的認知度を理解するために映像を見てから講演を開始した。
・生徒の意欲関心を高めるために、オリパラ教育のための掲示コーナーを特設した。

④成果

・母校卒業生が世界を目指し、努力をしている姿に感銘を受け、自分を見つめ直す機会となった。
・車いすテニスでは障害者も健常者も一緒にプレーできる競技であると認識でき、より身近な感覚を持てた。
・世界で活躍するには語学力の取得や世界の歴史や文化・習慣などの理解が必要であり、中学校で学ぶべきことがたくさんあると言う講師の言葉に生徒たちは努力することの意義を見出した。

⑵県立一宮商業高等学校

①取組プロジェクト

「おもてなし」「心のバリアフリー」
「スポーツ」「グローバル」

②取組内容

㈎ サーフィン誘致を契機に、シビックプライド（市民の誇り）を向上させるため、「波乗れコンサート」を開催し、地元を盛り上げた。サーフィン選手のトークコーナーの企画等生徒が全体構成も考え、一宮町との共催で行い、町やサーフィンの魅力を発信した。

㈑ 一宮町開催の「渚のファーマーズマーケット」にてブースを設け、ボランティアとして活動した。また九十九里トライアスロンにもエイドステーション（補給・給水の為の施設）ボランティアとして参加した。

㈒「WSLQS6000　サーフィン大会」を近隣小・中・高等学校の児童生徒が協力して取材した後、広報パンフレット「なみのれた～」を一宮町サーフィン業組合と協力し作成、地域や文化祭でも配付した。

㈓ 一宮町開催の「オリンピック・パラリンピック開催３年前を記念したイベント」に参加し、イベント終了後に会場地周辺の清掃作業を参加者と共に実施、自然環境の保護の大切さとおもてなしについて実感した。

㈔「シビックプライド向上計画～地域とともに『波乗れ一宮！』～」というオリンピックに関する活動を千葉県高等学校生徒商業研究発表大会で紹介。最優秀賞を受賞して関東大会に出場した。また、活動内容が東京新聞で掲載された。

㈕ ラグビー大畑選手から町長へオリンピックフラッグが渡されるオリンピック・パラリンピックフラッグツアーが開催され、一宮町小中学校と共に参加した。

㈖ ゴールボール講習会を開催し、視覚障害者のための球技を体験した。

③実践において工夫した点

・ サーフィン競技に対する認識の低さがあるので、地域にサーフィン競技を紹介することで機運の醸成を図った。
・ 障害者スポーツを体験することで、障害のある人たちの気持ちや共生社会の必要性を実感した。

④成果

・ 障害のある人たちへの理解が増した。
・ スポーツの楽しさと厳しさを実感できた。
・ 開催するにあたって、競技関係者だけではなく、大会を支える多くの人が必要であると実感できた。

３　おわりに

県内では、８競技が開催される。子供たちにスポーツへの関心はもちろん、思いやりや多様性の尊重、国際平和に寄与する態度を育んでいく上で、千載一遇の教育機会ととらえ、各学校においては、学校の特色や状況、地域の実態に応じて何ができるのかを考え、実践することを期待している。

なお、本編は県教育委員会『千葉県オリンピック・パラリンピックを活用した教育指導資料　実践事例集』より、抜粋編集したものである。推進校30校の報告書も記載されているので、ぜひ参考にしてほしい。